



①海部の樵木林業原本複製
②樵木(こりき)林業研究会応援団

三年前つくばの国際農林水産業研究センターに勤めていたときに農村開発領域の木村健一郎主任研究員より私の故郷、徳島県海部郡牟岐町、お隣の美波町に樵木林業というものがあり、その施業方法について現在ラオスとの共同研究において現地でも実践中であると話を聞いた。ラオスでは、天然由来のマイテュー(オトギリソウ科 *Cratoxylum* spp.) とよばれる木を白炭にして我が国へ輸出している。コストのかかる機械化の困難な山岳地域での施業として、手鋸一つで出来る樵木林業が着目されているようだ。

早速、徳島県農林水産総合技術支援センターの網田克明氏はじめ徳島県南部総合県民局の関係者の皆様に確認したところ、記録資料もたくさん残されており、大正初期には徳島県庁が「海部の樵木林業」と命名して全国にアピールしていたことがわかった。さらに当時徳島県山林会が作成した「海部の樵木林業」の原本は、県に所蔵はなかったが、大日本山林会の蔵書として保管されていた(写真①)。そして樵木林業が実施されていた美波町、牟岐町の林業関係の有志により樵木林業研究会(会長 谷崎栄之)が設立され、当研究会が一般社団法人日本森林学会の林業遺産へ登録を申請し、平成三〇年五月に承認された。研究会では、Facebook

に「樵木林業研究会応援団」のグループを立ち上げて関連する情報を随時提供し、メンバーのコミュニケーションをはかっている(写真②)。

樵木林業とは、徳島県南部の常緑広葉樹林(カシ、シイ、ウバメガシ、ツ



⑦樵木林業研究会現地視察会



日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう!

第22回 かいふ くりき 海部の樵木林業について

かぎうち ひさや 樵木林業研究会 柿内 久弥

バキ等を対象とした択伐矮林更新法である。直径二寸(約九㎝)以上の雑木を伐採し、それ未満のものは残し、八年から十二年周期で伐採し、谷筋などの地形を利用した魚骨状集材と呼ばれる珍しい集材路(ヤリ、サゴ)で搬出する。矮林施業とは低木仕立ての意味であるが、この地域は台風の常襲地域であり、自然の遷移にまかせるとシイ等の高木に占有され、甚大な風倒被害発生も懸念される。植生遷移を人為的に抑える事で、結果として風害に抵抗力を持つ森林がつけられている。この択伐により、①残された小木群の萌芽更新により早期の再成林化が可能となり、②皆伐と比べて期間あたりの収穫量が増加し、③林地の裸地化を防ぎ羊歯の繁殖も防止し、④森林の肥沃な状態が維持され、⑤新炭原木の適材化・安定供給に役立った。

日和佐川、牟岐川は流路延長が短く、水運に適していた(写真③、写真④)。薪木など短小材だと溪流でも容易に流すことができ、明治・大正期には沿岸の港から「イサバ船」と呼ばれる船に積載して直接京阪神の消費地へ輸送された。この地域のボサ(薪)はカシ類等

の良質のもので火持ちが良く、出荷された大半は銭湯等の燃料として重宝されたようである。しかしながら大正末期から石炭が普及し、薪生産は縮小。燃料革命以前の昭和四〇年代頃までは、農閑期の副業的な仕事として、農家の生活、地域経済に大きく貢献したものの、石油、ガス、電気などの新しいエネルギーの登場により、生活様式が変化し、樵木林業は、消えていったのである。

樵木材の生産・販売は江戸期から地元商業資本が独占し、全盛期は元禄から寛延期(十八世紀前半の五〇年間)であったようだ。美波町の四国霊場二十三番札所「薬王寺」には毎年多くの参拝者が訪れるが、本堂左手に建つ「宝篋印塔」は寛延三年(一七五〇)に廻船業者の豊後屋が建立したものであり、当時の隆盛がしのばれる。廻船業も新旧交替が進み、天明(一七八一)〜八十九頃からは、その後には日和佐廻船業の雄となる谷屋が登壇する。谷屋家住宅は平成二十九年六月に国登録有形文化財に指定され、現在、交流拠点として整備するため、クラウドファンディング等を活用し家屋

の修復が行なわれている。

牟岐、美波両町では地元住民と連携し、炭焼き窯の復活(写真⑤)や木馬道の復活(写真⑥)に取り組んでいる。かつて樵木材の管流しに活用された土場が現存していることも最近明らかになり、研究会では、その整備や常緑広葉樹林の再生・活用策を実施・検証中である(写真⑦)。さらにこの樵木林業を広く知ってもらうとともに、次世代に残すための記録映像を制作中間もなく完成する。森林サービス産業という新たな森林の活用も提唱されつつあり、樵木林業を新たな形で今後の地域活性化に役立てていきたい。

なお樵木林業研究会は、平成三〇年度、平成三一年度と一般財団法人日垂ふるさと振興財団から前述の活動について支援を頂いている。

【参考・引用文献】

- 1 林業遺産紀行「広葉樹択伐矮林施業―海部の樵木林業―」(森林科学86 2019.6)
- 2 「宝暦期における日和佐廻船業者の動向」(阿波学会紀要43 1997)



③薬王寺から日和佐川と日和佐港を望む



④樵木の山(五剣山)から牟岐港を望む



⑤牟岐炭焼き窯



⑥牟岐木馬と木馬道